05,

しざーず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
０５，

【Ｎコード】
Ｎ９９４４Ｋ

【作者名】
しざーず

【あらすじ】
新入生の一人の少女は、大きく聳える高校に足を踏み入れる。
そこは少女が今春から通う銀縞高校でって…男子高！？
何を間違えたか、少女はお隣の金縞高校へと迷い込んでいた！
だがトレードグループ『０５，』に選ばれ、無事銀縞へと帰る事になるのだが――――？

MEMBER

［＜初宮（はつみや）　まつり　（１６）　♀
熱しやすく冷めやすい性格、割と大雑把で、何を間違えたか男子高生に。
父はＩＴ関係の社長さんで、恋もお洒落も依然と興味がない。０５，。

［＜本城（ほんじょう）　湊（みなと）　（１６）　♂
単純バカ。学校唯一の特待生で庶民であるが、理事長の計らいで馬鹿なのに学校に在籍している。だが、その条件とは・・。０５，。

［＜時定（ときさだ）　朽（くちは）　（１７）　♂
父は大物プロデューサー。そのため比較される事が多く大人が嫌い。父子家庭に育つも甘えを知らず、意外と甘党で一番子供である。０５，。

［＜若松（わかまつ）　万（よろず）　（１８）　♂
家は極道の若松組。本人は次期当主で８代目。０５，。
意外と面倒見がいいお兄さんで、純とは腐れ縁で仲が良い。

［＜畑山（はたけやま）　純（じゅん）　（１８）　♂
両親は音楽家で、自身はサックスを得意とする。０５，で一番モテモテ。
明るくノリがいいため、何をしても許される人柄。まつりとは女友達の様に仲良し。

MEMBER（後書き）

このあとも追加していきます！

０５，　掟

第一条［＜０５，は、異性の憂いを晴らすため、努力を惜しまない事。必ず５人で編成すること。

第二条［＜０５，は、決められたら期間が修了するまで途中放棄・棄権を禁じる。

第三条［＜０５，は、月に一度異性とデートをすること。ただし、自ら誘いをかけてはならない。校舎内で済ませること。

第四条［＜０５，は、イベント時には必ず参加すること。ハロウィン、クリスマスなどのときには催しを行うこと。

０５，　掟（後書き）

どんどん追加していきまっす

01，　今日は厄日

降り注ぐ太陽の光をしみじみ感じながら、初宮まつりは登校する。
皮膚ガンとか本気で気をつけないと、とか思いつつ門前に到着。

私立銀縞（かなしま）高等学校。
そこが、まつりの通う学校だ。

お嬢様学校として有名なこの学校は、他国からも留学生が来たりと世界的なセレブ学校なのだ。
すぐ近くには、お坊ちゃま学校として有名な姉妹校の金縞（かねしま）高校もある。まあ自分には全く関係がない。

まつりの通う学校といっても、それは今日から。
入学式の今日は、初めて一人で高校を訪れる日。

目の前に聳え立つ建物に入った。
そこにはちゃんと、”銀縞”と書いてあったはずなのに。

＊

指定されたクラスの”１－Ａ”のドアを開くと、そこにはたくさんの男共が――。
（男・・・？）
鳥肌がたった。
何を隠そう、ここは金縞高。
「え、女子？」
スカートの私に向かって、一人が呟いた。
「一つ席空いてると思ったら女子かよ！ラッキー！」

見ると、席が二つ空いていた。あと一人は…トイレでも行っているのだろうか。
しかし、何を考えたら女子がここに入学すると思うのだろう。
「座って座って、訳は聞かないからさ」
（何でかを聞きたいのは――）
自分だ、と言おうとした瞬間、担任の男らしき人物が入ってきたため断念。

担任はまつりを見るなり首を傾げ、尋ねる。
「銀縞の間違いじゃないか？そこの生徒」
今更恥ずかしくて何も言えない。
わかっている、わかっているとも！

だが、生徒は思った。
ここでのチャンスを棒に振るわけにはいかない、と。
「何の間違いもないっすよ！」
「あいつ、ああいう趣味があって…」
（フォローになってない！）
白目になるくらい、まつりは絶望。
「――そうか。名前はなんだっけな」
「は、初宮まつりです…」
「初宮、あとで制服を取りに来い」
（…え？えええーー！？）
確かに今着ている服は、銀縞の制服ではない。色々予定が合わず採寸の日に間に合わなかったので、今日制服をもらう予定だったからだ。

しかし、なぜ先生も気づかないんだ。
女装癖のある生徒だと思われてしまったではないか。

屈辱的なＳＨＲも終わり、ようやく入学式まで休憩。
「初宮、お前まじで金縞な訳ねえんだろ？」
「…当たり前。何で男子高に入らなきゃいけないの？」
ムッという効果音が似合う顔をして、まつりが言う。
あはは、と笑って生徒が謝罪した。
「悪ぃな、そういう時期なんでー」
「もうっ」
これが本当に一流企業の御曹司達なのだろうか。

「初宮あ、制服取りに行けよー！」
冗談まじりに言われ、更に不機嫌そうに教室を出た。

「サイズは…Ｓだな」
「すみません…」
「更衣室で着替えて来い、式に遅れるなよ」
「はい、失礼しました」
（こうなったらやるしかない…）
職員室を出て、まつりはそう思った。
華やかな高校ライフで、まさか男として男子高に入るはめになるとは。しかも先生とトイレ要員以外クラスメイトが女だと知っているなんて。
更衣室に着き着替えながら、繰り返しその事を楽観的に考えようとした。

＊
「似合うじゃん初宮！」
教室に戻れば、皆が嬉々とまつりを迎える。
ただ、入学式直前とあって、緊迫したムードが漂っていた。
「ほら、お前ここな」
押されて、勝手に作った出席番号通りに並ぶ。
「んじゃ、出発！」
一人の生徒がそう言うので、”祝入学”と書かれた札を胸上につけ、式場へと向かった。

（眠たー…）
目をこすりつつ、まつりは理事長の話を聞く。
「――であるからして、本校の生徒から5人を選んでいく」
（自分には関係のないお話ですねえ…）
欠伸をひとつすると、理事長は眠気を覚ます様な一際大きな声で言った。

「一年、初宮まつり、本城湊。二年、時定朽。三年、若松万、畑山純。以上5名が、今年度の05，であるとここに宣言する」
（ふうん…って、あれ？）
確かに今、初宮まつりと言った気がする。
「高等部からの入学のための者に説明しよう。05，とは、あちらの女子高・銀縞高校の05，、つまり向こうとトレードする生徒のことだ」

（トレード…？）
つまり、まつりは０５，に選ばれたのだから、向こうの学校に通うということで――それって、すごくラッキー！？
一気のテンションのあがるまつり。隣の隣の席が空いている。
（トイレじゃなくて、お休みなのかな？）
それも置いておこう。今、やっと自分は元の通うべき学校に帰れるのだから。
「０５，に選ばれた５人は、堂々と男らしく学業に励むこと！」

（…まてよ）
帰るとしても、男としてだったことを忘れていた。
「では、これにて閉式とする」

＊

入学式からの教室への帰り道、クラスメイトがまつりの元へ集まる。
「残念だな～、初宮がいなくなんのかあ」
「でもおかげで、０５，がクラスに来る！」
「結果オーライだな！」
わいわい騒がしい連中は過ぎ、まつりは一人教室へと歩く。

と、その時放送が鳴った。
『お知らせします、先程０５，に選ばれた皆さんは、理事長室に至急、お集まりくださいませ』
教室の階までやっと着いたと思えば、下の階に逆戻りか。
再び階段を降り、別館の理事長室へ。

ノックをして、反応を待つ。
「入りたまえ」

扉の奥から聞こえる声に、誘導されてまつりは中へと足を踏み入れた。
「初宮まつりくん、いらっしゃい」
優しい顔のおじさんが、そうまつりを迎え入れた。

「君達は今日から、金縞高の０５，だ」

理事長は力強く、そう述べた。
周りには４人、ちゃんと生徒がいる。けれど、誰が誰なのかさっぱりだ。
「で、０５，って基本的に何をするんですか？」
まつりが聞くと、理事長は答えた。
「簡単だよ、同性ばかりで退屈な銀縞の生徒に尽くしてやるんだ」
「え、それって」
「安心したまえ初宮くん、学費は免除だ」
まあ家庭的には困らないが、なんだか面白そう。
「互いに親睦を深めてくれ、ではまた」
理事長がそう言うと、秘書が５人を部屋から追い出した。

「…ったく、何だってんだよ、うちの理事長」
赤髪の目つきの悪い男がそう呟いた。
「…とりあえず、自己紹介しますかあ」
けだるそうに、金髪の男が口を開く。
皆は賛同し、一旦最寄の会議室へと入る事にした。

「じゃあ自己紹介だな」
赤髪の男が仕切るので、まつりはこいつを3年だと確信した。
「まず一年からね」
隣の茶髪の男がそう言った。

「わ、俺、初宮まつりです」
「俺ぇ、本城湊って言いまーす」
先刻の金髪が言う。
こいつがもしかして入学式に来てなかった（仮）トイレ要員か。

「二年、時定　朽」
「え？時定紅葉（くれは）の息子さん？」
時定紅葉とは、大物プロデューサーで、大人気番組を生み出す有名な人物だ。
「…そうですけど、父の事は関係ありません」
黒髪が、窓からの陽に当たりきらきら光っている。
（それにしても、鋭い目…）

「三年、畑山純。色々よろしくねー」
背は標準くらいの茶髪の男が言う。
妖しげなルックスが印象的だ。
「で、俺が若松万だ。中々個性的なのが集まったな」
改めて周りを見渡すと、本当”男”って感じの輩ばかり。
「じゃあ親しみをこめて、下の名前で呼び合う事にしよっか」
純がにっこりとそう言うので、皆も同意。

「よし、じゃあ金縞０５，、ここに結成な！」
湊も元気いっぱいに言うので、まつりも仕方なく笑っておいた。

01，　今日は厄日（後書き）

長いですね…

誤字脱字の訂正は後日確認します。

０２，　初めてのお仕事

広い、無駄に広い校舎を歩く。
私立銀縞高等学校は、世界的なセレブ校であり女子高である。
そこにトレードグループ・０５，として、女の子でありながら初宮まつりは居る。

０５，初日のお仕事は、銀縞高等学校の生徒達に体育館で挨拶をする事。
５人全員が並んで廊下を歩く様は何とも言えない光景である。
普通女子高ではお目にかかれない貴重な男子生徒なのだから。

「ここが体育館かあ……」
「金縞と全く同じ作りじゃねえかよ…」
ぶつぶつ一年組が文句を言いながらも、三年組が押して入場。
『きゃ～～～～～～～！！』
大歓声の中、０５，はステージに立つ。この状況を例えるなら、アイドルグループのコンサートだろうか。

マイクを教師から受け取り、一人ずつ丁寧に質問に答えたり自己紹介をしていく。
その中に一人、無愛想な子がいた。

『朽くん？』
司会の女教師が話しかけても、ふいっと顔を背ける。
『こいつ、元々こうなんです。気にしないでください』
万がフォローすると、苦笑いして司会は進行。

「朽先輩、どうしたんですか？」
こっそりまつりが聞いても、冷たい目で睨まれるだけ。
放っておこう。
０５，に選ばれたことを、あまり快く思っていないのだろう。
『では、今日からよろしくお願いしまーす』
湊がまとめ、５人は体育館を後にした。

「はあ…疲れた…」
まつりがため息を吐くと、純がまつりの頭に肘をついて眉を下げ、呆れた様に笑った。
「まつり、このくらいで音を上げちゃ駄目だよ？」
「え、どういうことですか？」
「０５，は学費免除の分、ちゃんと女生徒に尽くさなきゃ」
パチン、と指を鳴らしウインクする純。
「それがどんな身分の奴でもな！」
湊も後付けして言った。
「まあ、男として女に囲まれチヤホヤされて過ごす高校生活は最高だろう」
万が嬉々とした顔でまつりに言うのだが。

（やっぱり…）
「朽先輩、大丈夫ですか？」
「……」
喋ろうともしない。
目を合わせようともしない。
「朽あ、なんか喋ろう？」

純が心配そうに覗き込んでも、またふいっと顔を背ける。
「朽、いい加減にしろ」
万がその鋭い目で眼をとばしても、微動だにしない。

――そのとき。
「いい加減にしろ…？」
重い口を開いた朽の本日第一声。
「調子こいて他人に媚売ってる君らだけには言われたくない」
ふう、と朽は再び口を閉じた。
超冷淡な、感情のこもっていない声。

キャラとしては受けがよかったものの、こうも仲を乱す様なメンバーだと考え物だ。

「朽先輩、言いすぎっすよ…」
湊が言っても、素晴らしい位無視。
「…よし、明日は休日だったな」
万がまつりに確認するように訊ねる。
「はい、そうですけど…」
「じゃあ明日、ここに集合。朽の心を開かせる」
未だにそっぽを向いて立っている朽を見て、まつりは言った。
「万先輩の頼みなら仕方ないですね」
にっこりと女の子の微笑みで言うまつりに、朽以外の全員が見惚れた。

「まつりが言うなら、俺もいっちゃお」
「僕は元々大賛成だけどねー」
「朽は？」
万が訊くと、少しだけ俯いて「わかりました」と同意した。
「じゃあ明日１２時、銀縞に集合！あ、一応メアドと番号交換しと

くか」
朽にも無理やり交換させ、各自教室に戻った。

「まつり君はどんな子がタイプですの？」
席に着くと、女子達がまつりの周りに集まった。
慣れるまで少し時間がかかりそう。
「んーと、特に希望はないけど、優しい子がいいな」
『素敵ー！』
（なにがどう素敵なんだ…）
一言喋れば騒がしい。
一体朽はどうやって切り抜けていくのだろうか。

「まつり君のおうちは何をやってらっしゃるの？」
「一応、父がＩＴ関係の社長で、母はその子会社の名誉会長なんだよ」
「まあ、リアルでいて嫌味も感じられないわ！」
――――…一体、誰が０５，なんかというものを考え付いたのだろう。
だけど、これで無事卒業できるなら…！

まつりがそう思っていると、湊が近づいてきた。
「やっほー、俺様参上☆みたいな」
『湊くん！』
女子のテンション急上昇中。
助かった、と席を立とうとすると制服を掴まれ逃げられない。掴んでいるのは、湊だ。
「え…」

「あははー、まつりどこ行くの？まさか帰るのかな？トイレ？――逃がさねえぞ」
オーラが黒い。
それはそうか、湊の周りにはクラスの半分以上の女子が集まってるんだもんな。
おとなしくまつりは席に再度着いた。

「湊くんは、中等部の頃から金縞だとお聞きしましたわ」
「うん、でも実は幼等部からエスカレーター式にね」
「まつり君は今年から？」
「俺は元々、違う学校に行ってたから…」
苦笑いしつつ、まつりは答えた。
憂いも垣間見える表情に女の子もうっとり。
という流れで、一日のお勤めは終了する。

まつりは帰り支度を済ませ、送迎車に乗って帰宅した。

＊

「おかえり、まつり！遅かったね」
父がリビングでそう迎えた。
「遅いってお父さん…いつもと同じだけど…」
そうだっけな、と言いながら父は一人笑っていた。

「ところでまつり、何故制服はズボンなんだ？」

いきなり指摘され、言葉が見つからない。
「しかもその校章、【ＧＳ】が銀縞で【ＫＳ】が金縞のはず。お前がつけているのは【ＫＳ】の方じゃないか」

「ごめんなさいっ」
大きな声で謝り、その場にいた使用人たちも驚く。
「私、何かの間違いで金縞に入っちゃったの！」
『！？』
頭を深く下げ、反省の態度をとる。
「では、学校に言って直して…」
「もう遅いの…」
「どうして？」
意を決して、顔を上げる。
「私、０５，っていうトレードグループに入っちゃったから！」
――――。
いまいち状況を把握していない父に、まつりは最初から全てを話した。

「――――そうだったのか」
全てを理解した父は、そう呟いた。
「本当にごめんなさい…」
「でも、まつりが可愛くも格好いいという魅力があってこその立場だ。誇りを持て。父さんは応援してるぞ！」
我ながら、理解力のある父を持ったものだ。
「ありがとう、お父さん」
「で、まつり。その四人くらい女の子だと知っているんだろうね？」
「あ…」
「知らないなら、近いうちに言っておく事だ。変な誤解を招く」
「はあい…」
少し叱られた。
普通は激怒なんだろうけど、滅多に怒らない父だから逆に恐ろしい。

（明日は１２時に集合…そういえば）

どうして入学式にも教室にもいなかった湊が、０５，に選ばれた事を知り、理事長室にもいたのか。
もしかしたら皆、湊がサボり魔であることを知っていたのかもしれない。
（幼等部からいるんだもんね）
疑問を解決したところで丁度、使用人から夕食の合図が聞こえた。

０３，　俺は女です

「１２時きっかり、５人全員集合したな」
万が言うと、皆は頷いた。
「じゃ、朽の心を開かせましょうねー」
純の誘導で、以前使った事のある会議室へ移動。
「じゃあ朽先輩に質問タイム！」
そう湊が言うので、皆で朽を囲んだ。

「誕生日は？」
純が訊ねると、面倒そうに朽は答える。
「２月１４日」
「バレンタインデー！？」
湊が驚きのあまり大きな声をだすものだから、朽にキッと睨まれた。
バレンタインデーが誕生日の人なんてこの世界にいくらでも居るが、
この目つきと愛想のなさでバレンタインデーなんて可愛すぎる。

「何型ですか？」
「ＡＢ型。ぴったりって言われるけど」
まあまあ理解は出来る答えが返ってきたので、まつりはちょっと笑
ってしまった。
「好きな食べ物とか」
「甘いものが好き。だけど、お菓子は好きじゃない」
（なんか可愛いぞ！）
案外、怖い人じゃないのかも。
そう皆が思い出した頃、初めて朽から口を開いた。
「皆のことも知りたい」

『！！』
初めて、朽が他人に興味をもった瞬間だった。
「特に――まつり、君のことが知りたい」
「へ！？俺！？」
素っ頓狂な声でまつりは確認する。
いきなりすぎて心の準備が出来てないというか、男にしかわからない質問されたらどうしよう…。
そんな事を頭の中で巡らせていると、何故だかまつりに質問しよう、という事になった。

「誕生日は？」
「７月の、１８日です」
「何型なの？」
「Ｏ型だったりします…」
「好きな食べ物は？」
「ミルフィーユとシュークリームは外せませんね」
「えっと…好きなタイプは？」
「面白くて優しくて明るい人！」
にっこりと笑って、全て答え終える。
皆、共通して思うことがあった。
昨日の笑顔や今のタイプなどから、まつりは”女の子みたい”。

「なあまつり、今後のために聞いておくが…」
万が意を決し、遂に訊いてみることにする。
「――――　お前、本当に男なのか？」
まつりは唐突な質問に、頭が真っ白になった。

そして、心の準備が出来たのか、まつりは口を開く。
「隠さず言います、私、初宮まつりは女です」

「やっぱりか…」
ふう、と息を吐く。
「金縞に間違えて入っちゃって。１－Ａの皆がかばってくれて…、それで女装癖がある生徒ということにして、制服をもらったんです」
「そうだったんだあ…」
純は寂しそうな仔犬の目をして、まつりを見る。
「やっぱ、駄目ですよね、こんなの。今から先生に言って――――」
会議室を出ようとした時、手を湊に掴まれた。
「え…」
「お前が女だろうが男だろうが、初宮まつりは０５，に選ばれたんだよ」
（あ……）
「そうだな。銀縞から何も連絡がないってことは、もう向こうがお前を男だと認めたんだろうし」
苦笑いで、万が納得。
「それに僕、まだまつりと遊びたいな」
純は笑顔でそういった。
「まだ未知的な部分も多いし」
朽は笑っていなかったけど、すごく優しい声音だった。
「じゃ、俺たちでまつりを守るかっ！」
「ありがとう…！」
まつりとしても、まだ０５，でいたいし、この４人と過ごしたい。
それがイケメンだからとか、そういう浅はかな理由じゃなくて、先刻気づいたんだけど。
「改めてよろしくお願いします」
ここが、自分にとって居心地のいい場所になりそうで。
一礼をして、少し涙が零れそうになったことは内緒。

＊

数日して、０５，お決まりの場となった会議室にて。
「そういえばさあ、もうすぐ親睦旅行だよねぇ、一年」
純がパックジュースを飲みながら、湊とまつりに話しかける。
「そうなんすよ、俺はともかくとして、まつりが可哀想で…」
げんなりとした表情を見せつつ、湊が語る。
「親睦旅行といっても沖縄に３泊４日くらいですし、大丈夫ですよ」
「俺特待生ちゃんだから、久々の沖縄なんだよね」
湊は昨年末、実家が倒産して今年から０５，に３年間選ばれる代わりに、無料で学校に通っているらしい。
（あ、だから０５，に選ばれてるって分かってたのかあ）
疑問を解決できて、少し嬉しい。

「でもさ、その間僕ら暇だよね」
純がつまらなさそうに呟く。
「――２年とか全く予定ない」
いや、授業はどうしたお兄さん。
「よし、じゃあこうしよう。０５，も一年の皆と親睦を深めるため、その旅行に着いて行く」
遂に、こんな意見まで飛び出した。
「先輩助かります！」
ノリノリな４人を、まつりが止められる筈もなく。
「早速理事長に報告だ、純頼んだ」
「あいあいさー！」

「０５，も親睦旅行に参上…」
「朽も行く気満々だし、何の問題もないな！まつり！」
……あの、みなさん。
「０５，の親睦も兼ねて、Ｌｅｔ’ｓ　ｇｏ　ｔｏ　沖縄！」

私に拒否権はないのですか。

０４，　沖縄旅行　前半

やってきました、沖縄県。
入学式の日よりも凄まじい日光が生徒達を照りつける。

「それにしても……」
「まさか０５，のみなさんと旅行に来られるなんて…！」
「汗をかいたまつり君も素敵…！」
麗しゅう美男子五人組。
予定通り沖縄到着。
「先ほど朽様を見かけたわ！」
「あのクールさ、捨て難いわよ！」
あの朽を朽様だなんて、やっぱり待遇違いすぎ。

「まつり君、あの、よろしければ私と周りませんこと？」
（げ、誘われた…）
「大丈夫だよ、俺詳しいから任せて」
「頼もしいわ、まつり君…！」
人ってすごい。
思い込んだら、何でも出来てしまう。
自分が男だと思いこめば、”まつり君”が出来上がる。
「まつりだけずるいよ、僕も誘ってくれなきゃ！」
そう言ってやってきたのは純。
それでキャーキャー言う女子の気持ちは、”まつり君”にも”まつりちゃん”にも分かる日は来ない。
「純様も一緒に周って下さるのですか？」
一人の生徒が訊ねると、爽やかに笑って、
「僕も可愛い子達と一緒に周りたいんだよ」
と華麗に述べた。

「最初はどこに行くの？」
まつりが女の子に訊くと、女の子は照れながら、
「海へ行きたいんです」
と答えた。
さすがにこの四月の寒空の下、泳ぎはしないだろうけど。
「んじゃ、行こっか」
純が促すと、他の女の子達も足を進めた。

＊

「万様はどんな方がお好みで？」
一匹狼の様な万に群がる小動物は十匹くらい。
「…そうだな…清楚でいて、それで少しわがまま位が理想だぜ」
（大人な意見…！）
勿論真剣に答えてはいるのだが、万が言うと二割増ナルシストの様になる。
それに対して何も思わない女子も、余程頭がハッピー状態なのだろう。嗚呼、平和。
「万様、サンパウロの丘行きましょうよ」
女生徒に連れられ、万はそこへ向かった。

＊

湊と朽は、国際通りを散策していた。湊の周りには女の子がたくさんいるのだが、朽の周りには一人も女の子がいない。なぜなら、後ろでストーカーの様について来ているからだ。
「朽先輩、なんか買うんすか？」
きゃっきゃと湊の周りにいる女の子を、朽は心底目障りだと思って

いる。
「――別に目的はない、俺歩くの好きだし」
後ろの女の子もきゃっきゃ。
朽は心底うざったいと思っている。
歩くのが好きだと聞いて、女の子が妄想しないわけがない。校舎で共に散歩したりだとか、デートだとか。
月に一度、０５，は女の子一人とデートをしなくてはならない。
校舎内といっても色々あるから、これも女の子たちの楽しみの一つ。
只、そのことを朽が知っていて、面倒だと思っているのも確か。
「健康的ですねえ」
「悪かったね、何か買うなら勝手に行けば？」
初めに比べ、朽の言葉に感情が出てきた。
今まで通り冷たいけど、まだ良くなった方。
「いや、俺先輩の事もっと知りたいんで。ねー！」
『はいっ』
湊が後ろにそう振れば、女の子たちも頷く。
はあ、と溜息と吐き、朽は先を急いだ。
（来なきゃよかったな）
後悔先に立たず。

＊

「まつり君、みてください！綺麗な貝殻！」
「うわあ、本当だ」
日焼けが嫌なまつりは、営業していない海の家で休憩中。女の子はみんな、純と海を見たり、貝拾いをしている。
「海、きれいですね」
「うん。夏になったら、泳ぎにこようか」
「待ってます！」
（はあ…飽きた…）

そんな黒い想いを募らせていると、走って純がやってきた。
「はあ…っ、はあっ…、見てみてまつり！わかめ！」
「何でそんなの持ってくるんですか…！」
少し、可笑しくて笑ってしまった。
「笑うことないでしょー？わかめって可愛くない？」
「どこが…っ、ねえ、そう思わない？」
女の子に話しかけると、苦笑いで返される。
「うーん……私には難しくてよく…」
難しくて、という言葉を聞いた純が、得意気に話す。
「つるつるしてて、尚且つウェーブしてて、あとわかめって響き？」
「あははは！純先輩独特すぎっ…！」
本気で大笑いしてしまった。
「まつり君、本当楽しそうですわ」
「え、そうかな？」
「さっきからずっと、笑ってらっしゃいますよ」
微笑まれ、少し笑いを控えた。
ちょっと制限しないと、キャラが崩壊する。
「あれ、そろそろ集合時間だ」
純が腕時計を見ながらそう言った。
「そろそろ戻りましょっか、さあ、貴女も」
女の子の手を取り、まつりは華奢な体で歩き出した。
純も仕方なくわかめを置いて、他の女の子を呼びに行った。

「まつり、海はどうだった？」
帰るなり、湊が訊ねてきた。
「楽しかったよ、ちょっと焼けちゃったかなー…」

「ははっ、健康的！あ、そうそう、朽先輩歩くの好きなんだってさ」
他愛もない話をしながらホテルに着く。０５，は別室だったが、部屋割が重要。
「じゃんけんにする？」
純が言うと、万が否定。
「部屋は三つある。まつりが一人の方がいいだろう」
あとは朽と万、純と湊のペアになった。

「親睦旅行って、三泊四日もあるのか…」
一人まつりが呟くと、無駄に広い部屋に響き渡る。
沖縄に来たことは何度もあるけれど、一人の夜は初めてだ。
ちょっと寂しい気もするが、しょうがない。自分が女であることに苛立ちを感じてしまった。

そろそろ夕食の時間だ。
部屋を出ようとすると、丁度いいタイミングでノック音。
扉をあけると、そこにいたのは意外にも朽だった。
「…万先輩が呼んで来いって。下の食堂で、女子とご飯だってさ」
（なんだ、それだけか）
何を期待したわけでもないが、的外れな感じがする。
「分かりました、行きましょう」
微笑むと、朽も少し照れ笑い。
それを不覚にも、可愛いと思ってしまったり。

一階のロビーを奥に進み、”銀縞高等学校様”と書かれた大広間に入る。
「広すぎないですか？」

「別に。一年全員と俺らと教員で丁度いいくらい」
大広間というより、巨大広間がふさわしい。
冗談抜きで広いし、明るさも半端ない。
よく見れば、もう万も湊も純も女の子達に囲まれ、食事を始めている様子。
「あ、まつり君！朽様！」
「…見つかっちゃったな」
朽がぼそりと呟いて、自らの足で女の子達の元へと歩いて行った。
（朽先輩が自ら……あ、歩くの好きなんだっけ）
そう気味悪く思っていると、まつりの元にも女の子が集まる。
「今日は沖縄の民族料理ですっ」
（可愛いなあ、女の子は）
自分は劣ってしまうけど。
と考えつつ、女の子に誘導され席に着く。
「美味しそう！早く食べよっか！」
「はいっ」
温泉に入って高級なベッドで眠る。こんな日の繰り返しが続く。
非日常的な０５，でよかった。生徒だったらつまらなくて、途中で帰ったかもしれない。
「まつり君、明日も一緒に周りません？」
「あ、ずるいです！私も一緒に！」
「皆で周ろ？明日は純先輩と行動しないと思うし」
すっ、と口からでた言葉。
いつもなら、ちょっと考えてから言うのに。
「そうですわね」
慣れてきたな、非日常に。

０５，　沖縄旅行　後半

『朝になりました、体を起こし、一日の始まりを迎えましょう』
ホテル内に放送が流れる。
まつりはそんな指示がでる数時間前に起きていた。何故なら、ある相手とメールをしていたからである。まあそんな非常識な事をするのはただ一人、湊だ。朝五時に連絡があり、寝起きの良いまつりはちゃんと付き合ってやっているが、これが朽だったらどうなっていたことやら。
「うう…眠い…」
今日は首里城に行く予定なのに。女の子たちに心配されたら正直厄介。
一体、いつから湊は起きていたんだろう。

メールの返信がきた時、最初から無視しておけばよかったな、と携帯の画面をボーっと見つめながらまつりは思った。
というか、湊は純と寝ていたような。もしかして、一人の自分を気遣ってくれたのだろうか。
（いや、あの湊に限ってそれはない）
ここ数日の湊を見る限り、彼にそんな気遣いが出来るとは思えないというか思わない。この間の言葉には少し驚いたけれども。
”お前が男だろうが女だろうが、初宮まつりは０５，に選ばれたんだよ”
（あの時はちょっと嬉しかったけど！）
服を着替え、髪を整える。私服だが、父が買ってきてくれた男物の服。ピンは純とお揃いの物。ピンと付けるという共通点があったので、純がくれたのだ。

（お腹すいた…）
とりあえず、湊の元に行こう。そして、少し叱ろう。
そう思い、部屋を出た。

湊の部屋に着き、ノックをする。扉を開け迎えてくれたのは湊だった。
「あ、まつりおはよう」
「おはようじゃないでしょ？あんな時間にメールしてきて！」
ジェスチャーで、ごめん、と手を合わせ、はにかんだ様に笑う。まつりは許すことにした。別に、そこまで怒ってないし。
「純先輩は？」
訊くと、首を振った。
「あの人、寝起き最悪って有名なんだよ。中等部から噂あってさあ」
（なるほどね）
つまりまつりを気遣った訳ではなく、起きたら純がまだ寝ていて、噂からの恐怖と寂しさから、同学年のまつりにメールしたという訳か。
「でも、そろそろ起こさないとまずいよ？」
そう言って奥に入っていった湊についていくと、布団に丸まった純が見えた。
「ああ、なんか意外だなあ」
まつりが呟くと、湊は布団を揺らした。
「せんぱーい！朝ですよー！」
「うーん…」
中々起きない。
「じゅーんせーんぱーい！」
「あああああ！うるさいな！分かった！起きるよ！」

（…怒ってる？）
寝起きが悪い純は、人に起こされると機嫌が優れないらしい。噂は本当だった。
「着替えるから出てって！」
二人を追い出し、純は着替えを始める。ピンをしていない自然体の純も女の子にモテそうだ。寝起きが良ければ。
「……万先輩達の所行こうか、湊…」
「――――そうだな…」
苦笑いで、二人は隣の部屋へと向かった。

＊

昨日と同じ事が続き、親睦旅行ｉｎ沖縄も終わりを迎えた。０５，の中でも一年全員でも親睦は深まったので、まつりの中ではまあ良しとする。
「では、一年の親睦旅行を終了致します。解散！」
先生がそう言い、一年の生徒達は皆各自それぞれ散らばっていった。
「楽しかったね、まつり！」
純がそう言う。あの寝起きを見たら、素直に頷けないけど。

「では、また学校で」
０５，も、それぞれ帰路を辿る。
本当は一年だけの旅行だったけど、あの三人が来てくれて本当に楽しめた。
この非日常にも慣れたし、男として演技するのも悪くない。
その時、後ろから声をかけられた。
「まつり君」

（あ、海の時の子）
まつりに貝を持って来た子だった。
「どうしたの？」
「あの……っ、もしよろしければ今月は私とデートして頂けませんか？」
まさかのお誘い。
特に予約も入ってないし、まつりは快くＯＫした。女の子と遊ぶくらいに考えればいい。そんな軽い気持ち。
「では、来週の土曜日、高等部校舎の下でお待ちしてます」
「うん、分かった。けど、ごめん…名前訊いてもいいかな？」
女の子はキョトン、として少し経ってから、
「――――暁　宙と申します」
と照れくさそうに言った。

宙と離れ、まつりは少し思った。
（モテるって、快感！）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9944k/

05,

2010年10月14日13時04分発行